資料1　学生のまとめの感想レポートから

○私はこの５作品を見て本当に勉強になったし、最後には見て良かったと思える自分がいた。最初、原爆のビデオを見ると知って「ちょっと怖そうだから嫌だな」などと思ったりもしていた。たしかに、原爆の恐ろしさを出すためにも残酷な映像のシーンがほとんどの作品にはあった。しかし、見ているうちにそのようなシーンもなぜか受け止めて見れるようになった。なぜなら、原爆や原爆後遺症を恐いものだけだと決めつけて見るのではなく実際に起きた出来事だということを考えもっと理解しようと思ったからだ。５作品ともそれぞれ個性のある作品だった。

最初に私が見た作品は「はだしのゲン」である。アニメだったからかとても見やすく感じた。また、今の時代にはないような家族愛が伝わってきて良かった。ゲンが力強く生きていく姿は作品を見終わった後からずっと印象に残っている。ゲンは子どもであるがとても心が強い子で、その分思いやりがあり素直でとても優しい子である。ゲンの何事にもがんばって取り組み、一生懸命な姿に思わず共感してしまうほどだった。ゲンの母が原爆投下後に子どもを産む。その生まれてきた子のミルク代の為に働くゲンはひと回りもふた回りも成長した気がする。しかし、栄養失調で生まれてきた子は最後には死んでしまう。このような経験をした母親は当時多かったのではないだろうか。戦後の希望の光を失った母親はどんなに悲しかったことだろうか。「ひろしま」や「原爆の子」は原爆後遺症のことを主に取り上げていた。原爆後遺症は、人間にとって一生消えることのない傷だと思う。「ひろしま」では一人の少女が白血病にかかるところから作品が始まる。しかし学校の先生を含めクラスメイト達は白血病について無知であった。そのことにひどくショックを受けるシーンがある。実際、今でも白血病や他の原爆後遺症についてほとんど無知の人たちは日本中にたくさんいる。いや、世界中にはもっとたくさんいるだろう。私自身、このビデオを見て初めて知った白血病のことなど結構ある。原爆投下後７０年は広島には草や木が生えないという噂が出回る。もし今、広島の町だけ草や木が生えていないと想像するととても恐ろしいし絶対にそのようなことは考えたくない。当時の映像を見る限りでは本当に７０年間、草や木が生えないように見える。しかしダイコンの種から芽が出たことにより広島市民に希望の光が差し込んできた。そして広島の人の気持ちが草や木にも伝わっただろう。その時の事を思うと広島の人は嬉しかっただろうし、心から安心したのではないだろうか。「原爆の子」では白血病のような大きな病気ではないが、火傷を負い盲目になった一人の老人が主に出てくる。精神的に落ち込んでしまっているこの老人は、このような姿になり生きる価値もないと自分を否定的にどんどん追い詰めている。とても悲しいことだ。この時代は生きていることさえも「贅沢」な時代だったのだろう。たしかに、戦争で犠牲になった人のことを考えると「生きる」ということはとても「贅沢」なことだったのかもしれないと思った。命が助かり「もっと生きたい」と思っている人もいつ発病するかわからない原爆後遺症に怯え、戦争が終わってもずっと不安になりながら生活していたと思うと心が痛い。そんな時代が本当にあったと思うことさえ信じたくない。しかし、実際にあった出来事だ。後ろを向かず、前向きに事実を受け止めて解決していかなければならない。「黒い雨」は映像がリアルだったことが印象に残っている。この作品の映像が一番、当時

の原爆投下や投下直後の状況に近かったのでないか。そのくらい正直ショックを受けた。回りを見回しても当時のそのままではないかと思うくらいだった。私はもちろん実際にその状況を自分の目で見たわけではないが、テレビから伝わる映像だけでも目をつぶりたくなる箇所がいくつもあった。もし、実際にそのような光景を目の前にしたら私はもうその場にうずくまって動けなくなっただろう。死体が積み上げられているシーンや川から死体が流れてくるシーンには原子爆弾というたったひとつの兵器が生み出した悲惨な現状を現している。「黒い雨」でも原爆後遺症のことが出てくる。しかし「ひろしま」や「原爆の子」とはまた違った原爆後遺症だと私は思った。この二作品は主に原爆にあって放射能などから発病する“身体的”な原爆後遺症だが、「黒い雨」の場合は車のエンジン音に反応し車に突進していく青年の“精神的”な原爆後遺症が取り上げられている。私はこの時はじめて白血病や他の原爆後遺症以外の原爆後遺症があると知った。まさか精神的な原爆後遺症なんてあるとは思っていなかったからだ。しかし、精神的なものであれ身体的なものであれ原爆後遺症には変わりはない。エンジン音を聞くたびにあの戦争を思い出し車に突進する、その繰り返しをしていけばいつか精神的に体はボロボロになっていくはずだ。私は身体的だけじゃなく精神的にも人をおいやってしまった原子爆弾のことを思うと憎い。また、原爆後遺症で子どもが出来ない身体になった女性は結婚できないということには非常に腹立たしかった。これも一種の差別である。女性にとってはとても深刻な問題だっただろう。子どもができないうえに結婚までできないのだ。放射能の混じった雨に打たれたから必ず原爆後遺症が出て不健康になると考えていたのだろうか。もちろん白血病になる人がでたりと症状はさまざまかもしれない。だが、みんながみんな健康でなくなるわけではないと思う。後遺症がでない人だっていたはずだ。まさか原爆後遺症による差別があるなんて考えてもみなかった。原爆後遺症によって差別されることは悲しいことだ。私がこの五作品で最後に見た作品は「ゴジラ」だ。なぜ「ゴジラ」という作品がこの原爆の作品の一作品として選ばれているのかまったくわからなかった。私は今回初めて「ゴジラ」を見たので正直驚いた。最初の方を見ていても未だに原爆との関わりあいがあるのか納得できなかったが、中盤でなぜ原爆と関わりあいがあるのかが納得できた。ゴジラという生物は人間の度重なる“水爆実験”から生まれた生物だったからだ。水爆実験では放射能率はそんなに分からないはずだがゴジラの足跡から発見された放射能から非常に高い放射能率が出た。そのことから想像を超えるような水爆実験の数を行っていたのではないかと思った。「ゴジラ」は実際にあった話ではないので見て文章にするのがとても難しかった。架空の話ではあるがどこか戦争や原爆に似ているようにも思えた。

やはり最終的な結論は「戦争は良くない」「世界中が平和になりますように」などに達する。原爆や戦争は人の命を奪うだけでなく人間として大事なものをどんどん破壊していくように感じた。広島や長崎で起こった悲劇的な出来事を無駄にしてはいけない。もっと平和について考え理解することが大切だ。世界では核を持っている国はたくさんある。最近では原爆ドームの千羽鶴が焼かれたりする事件があり戦争への意識が薄れてきているようにもみえる。広島の人が日本の人がもっともっと平和について訴えなければならない。もちろん広島や日本だけの人ではなく世界中にいる戦争や核を反対する人たちが訴えなければならない。科学の発達が進む今だからこそ恐ろしい兵器を作るのではなくもっと平和で人の役に立つものを開発していってほしいと思う。（ｆ２）

○私は、今までにこれほどまでヒロシマ・原爆について真剣に考えたことはなかった。ビデオについても絶対に自分からは見ないような物ばかりが選んであった。一本一本レポートを書くのにもはっきりいってとても苦労した。時間がとてもかかったがそれだけ考えさせられたということだ。今回のビデオについて感想を書くのにとても苦労したのは良いことを書こうとかいうことが頭の中に少しでもあったからかもしれない。もっと楽に映画を見れたなら、もっと違う見方の感想が書けていただろうと振り返ってみてそう思う。

「黒い雨」はずいぶん前に見た映画なのであまりはっきりとは覚えていないが、人のあたたかい部分が見れたような気がした映画だった。だから、広島が都市として原爆からものすごいスピードで復興できたのは希望を捨てなかった多くの人たちがいたからだと思った。それに、心の病というものについて初めて考えた。最近になってＰＴＳＤという病気が病気として認められるようになったからだろう。今までは戦争のことを考える上でこんなことを思いつきもしなかった。戦争中や戦後などは心の病にかかっている人たちは多かっただろう。戦争は肉体的にも人を傷つけるが、精神的に傷つけるほうが倍にひどいと思う。だから、病名もなく、世間の人たちの理解もなく、何の治療法もなかった時代なので多くの人が苦しんだだろう。でも、私は今まで原爆を落とされた直後の被害ばかりに目を向けすぎていたと思う。だから、今回心の病気に気がついたのだ。５本の映画の中で一番被爆者への差別の訴えが強かったのはこの映画だろう。原爆が落とされてそんなに年月が経っていないのに、広島出身の人が被爆者の人へ差別するなんて思ってもみなかったので、衝撃的だった。

「ヒロシマ」については、全体的に記録映画みたいな感じを受けた。暗いイメージが強く印象に残った映画だったのであまりもう一度みたいとは思わない。やはり言い方は悪いが戦争はもう終わってしまったことだから、明るい印象で次につながる感じで映画が終わって欲しかった。暗い終り方だとヒロシマに未来も何もないような気がするのであまり好きではない。映画の中で、「みんなに原爆ついてもっと知ってもらいたい。特に広島の人に原爆についてもっと知ってもらいたい。」という言葉が出てきたが、私はこの言葉に本当に痛いところをつかれた気がした。私は本当に原爆について本当に何も知らない。映画を見ていても、知らないことばっかりだった。広島出身にもかかわらず何も知らないが、私みたいな人たちは意外と多いだろう。でなければ映画の中にあの台詞が出てくるはずがない。平和な時代だからこそ忘れてはいけない出来事なのに、今の日本の人たちは私も含めて口ばっかりで大事なことをすっかり忘れてしまっているような感じがする。

「ゴジラ」はいろんな意味で考えさせられた映画だった。でも、私の中では５本の中で一番おもしろかった。この映画を見た後に、私自身ゴジラという存在があんなにも悲しい存在に見るようになるとは思ってもいなかった。「ゴジラ」という映画はただの子ども向けの怪獣映画だと思っていたから、原爆や水爆、放射能といったものの意味が映画に込められているなんて思ってもみなかった。この映画を見てまた世界の将来が不安になった。人間が作ったものに手がおえなくなったら、それを倒す何か新しいものを作る、これは本当に恐ろしいことだ。人間の科学は進歩しているが、もう少し人の手からは良いものも悪いものも作れるという重要な意味・責任の重さを考えた方が良いだろう。どんどん新しいも

のが生まれても、人の手におえなくなってからでは遅いと思う。

「はだしのゲン」は今回の５本の映画の中で、唯一のアニメ映画だった。私も今までに何回も見たことがあった映画だ。映画の中でどの映画にも出てきた「戦後何十年も植物は生えないだろうと言われたヒロシマの地に植物の芽が出る」と言うシーンの本当の意味をこの映画を見て分かった気がした。麦という例えだけで使われているだけかもしれないが、その例えはヒロシマの地に芽が生えるという例えにピッタリだと思った。ヒロシマの将来や未来に希望がある感じがして、とてもいいと思うのだ。作者の人から、ヒロシマの人たちや都市に対して「負けずに頑張れ」とエールを送られているような感じが伝わってきた。アニメは幅広い世代の人に見てもらうことが出来ると思うので、これからもずっと残って行く映画だろうと思う。

「原爆の子」は戦争・原爆関係の映画にしてはめずらしく悲惨な光景が印象に残らなかった映画だった。自分勝手な感想が一番出た映画でもあった。映画に出てくる先生は無神経でおせっかいにしか思えなくて、とても腹が立った。何でもかんでも戦争のせいにしてはいけない。映画を見て、時間が経てば経つほど原爆による被害がひどくなるというのはつらいことだと思った。時間が経ち町も復興していているのに、今度は自分が病気になってしまうなんて悲しすぎる。でも、多くの人がこの苦しみを味わったんだろう。戦争が終わってもなお人々を苦しめる原爆は恐ろしいと改めて思った。それに、戦争や原爆を知っている人がいなくなってしまったら、日本には平和に慣れている人ばかりになって大変なことになるだろう。だからこそ、次に戦争・原爆の悲惨さ・むごさ・悲しさを伝える本やビデオなど何かの形で確実に次の世代に伝えないといけない。

ヒロシマについての自分なりのイメージは、今まで特にあまり考えたことはなかった。小学校や中学校などでどんなに小さいころから平和学習をしても適当に考えてすませていたし、平和公園や資料館に行っても遠足気分で真剣に考えたことはほとんど記憶にない。平和や原爆というそれだけしかヒロシマにはないのかと思うと逆に嫌でしょうがなかった。８月６日にはテレビが一日中原爆についての番組になるのはとても嫌だった。でも、最近は全然放送していないのがとても不思議に思う。原爆の番組を放送していても見ないのに、放送しなくなると疑問に残るという矛盾は、やはり少しは自分の中でヒロシマを意識しているからだと思う。広島が国際平和都市と呼ばれているのを聞いたことがあるが、このことについて私は本当にやめて欲しいと思う。私が知らないだけなんだろうが、ただ平和平和って言っているだけのような感じがして軽く聞こえるのだ。国際平和都市といっているのに、実際には８月６日に式典が平和公園であるぐらいしか知らないし、都市をあげて何かやっている訳でもないのにそれを大きくアピールするのはやめて欲しいと思う。きっと私の中ではこのバイトをする前もした後でも、戦争で原爆を落とされたっていうイメージしかヒロシマにはないだろう。このイメージだけは５本の映画を見ても変わらなかった。原爆が落とされたことの悲惨さや平和の重要性を伝えること、忘れないことはとても大事なことだ。でも、広島が伝えているのは私には被害者意識が強すぎているように感じる。もうそろそろ被害者の立場から平和を訴えるのではなく、何もなくても平和を訴えれるぐらいの感じで世界平和を訴えて欲しいし、自分自身も平和を考えていきたい。（ｆ３）

○5 本のレポートを終えてみて、素直に「思った以上に大変だったなぁ」と思った。しかし振り返ってみると、小・中・高校で必修として組み込まれていた道徳や平和学習がない今、一度にこれだけの原爆映画に触れられたことはとても貴重な体験であったなと思う。昔一度見たことのある作品も年齢や目線の差でまた一味違う感想を持つことができたような気がする。

今回この5作品を通して改めて思ったのは、いかに知らないことが多いかということだった。とくに「ひろしま」「原爆の子」「黒い雨」で強く描かれていた原爆症の症状や差別、人々の暮らしぶりなどがそれにあたる。原爆にあった苦しみ、その後の後遺症の苦しみ、そしてさらに周囲からの差別と偏見の苦しみ。つらい思いをした人が後々までも味わったその苦しみの多さに驚いた。また、そういった人々が原爆症を隠しながら肩身の狭い思いをしながら生きていかなくてはならないという現実があったことはショックであった。「ひろしま」のレポートでも触れたように、原爆の苦しみをバネに広島全体が一丸となって立ち上がって戦っていくというイメージが私の中にあったからだろう。しかし一方では原爆を忘れることなく力強く生きていくんだ、といった人物もそれぞれの作品の中で描かれていた。映画だからこそ強く美しいヒーロー的存在に映るが、実際にそうして原爆にあった本人たちが声を上げていくことはどんなにたいへんなことであっただろうかと思う。

しかしふと考えてみると、現代でも時々、特に終戦記念日が近づくと原爆病院や被爆者の今の様子、1945年当時の様子がニュースで流れる。今回私がはじめて知ったと思っていることも実はテレビで何度か目や耳にしたことのあることなのかもしれない。ということは今までいかにそれに興味がなかったか、無関心であったかが表れているようにも考えられる。実際広島に住んでいて、被爆建物が間近にある環境で原爆の話をされてもそれはもう遠い昔のこと。全くといって良いほどピンとこない。おまけにふーん、そう、程度で終わってしまう。その割に恐ろしいイメージばかりが先行してしまってますます原爆作品に目が向かない。そのように考えると今回「ゴジラ」、「はだしのゲン」が含まれていたことは興味深い。少し離れたところからではあるが違った角度でそれを見ることができた。特にゴジラ。とてもレポートしにくい作品であったがたいへん頭を使わされた。少し分かりにくかったが、あの古めかしさが逆に新鮮だったりもした。

先程、いかに自分が今までヒロシマに対して無関心・無興味であったか、と書いた。現地に住んでいる者でさえそうである。ましてや他県に住んでいる人々はどうなのだろうか。ヒロシマと聞いた時にどんな具体的イメージがあるのだろうか。

以前、こんな話を聞いたことがある。海外へ旅行したときに現地の方から出身地を聞かれ、日本と答えた。次に日本のどこかと聞かれたので広島と答えた。すると「広島！原爆が落とされた街ですね。あなたは原爆が落とされたことについてどんな考えをお持ちですか？」と聞かれたという。詳しい知識も具体的な事実も知らない、自分のはっきりとした考えも持ち合わせていない、ましてやそれを外国語で喋るなんて…。と、大変困ったという。海外で下手に広島という地名を口にしないほうがいいよ、日本＝首都東京というより＝広島の方がよっぽど有名だよ、という話だった。また最近では、モンゴル人女性歌手が「折鶴の少女」という歌を日本に逆輸入したという話題も新聞で何度か見かけた。日本人留学生によってモンゴル全土に広まった日本の平和を願う歌を、当の日本人は全く知らなかった、広島県人でさえもほとんど知らなかった。当然日本でも誰もが知っていて愛され

ている歌だと思っていたその女性歌手はただただ驚いたという。今、その歌が教科書に取り上げられるなど、この女性歌手の活動によって広められているらしい。その話題に今度は私たちもびっくりである。おかしな話だなと思う。知っている、知らないというのが県レベルどころかすでに国レベルにまで達していようとは。歌のモデルとなっているのは佐々木貞子さんであるという。歌は知らなかったがモデルの佐々木貞子さんは折鶴の子の像のモデルとしても有名なので私も知っていた。

折鶴に関して、少し前に修学旅行生などによって全国から寄せられた折鶴が放火によって焼かれるという信じがたい出来事があった。同時期に原爆死没者名簿が納められている記念碑がペンキでいたずらされるという出来事まで…。これはもう完全に軽いいたずらという範囲を越えている。犯人は軽率な気持ちで、遊び感覚でしたのだろう。50数年の年月を経て、ヒロシマという場所で訴え掛けられる平和の祈りの重みが薄れてきたのだろうか。いや、発せられているメッセージは同じだろう。やはり受け取る側に変化が生じてきたのではないか。とくに若い世代を中心に。“ひろしま”と聞いて“広島”を連想するか“ヒロシマ”を連想するか。どうしてカタカナなの、と思う人も少なくはないと思う。

そもそも平和慣れというか平和ボケというか、平和なことが当然といった雰囲気の現代である。(ここでは近年増加している事件や事故は除く)戦争は怖い、恐ろしいと思ってみても私たちにとってみれば映画やテレビや小説の中の様な遠い世界。今こうしている間にも世界のどこかでは戦争によって尊い命が失われていっている、というフレーズはよく耳にするけれど実感は沸かない。戦争を実際に経験した方がいいという意味ではないけれど、実際経験した者でないと本当のところよくわからない部分は必ずあると思う。アメリカのように銃社会でもなければ軍隊がいるわけでもない。いつ近隣の国が攻め込んでくるか分からない、いつ民族紛争が起こるか分からないといった状況でもない。このような意味で平和に慣れてしまっているので、平和を祈る・平和を願うことから余計に離れてしまっているのではないだろうか。だから平和学習が重々しく堅苦しいものに思えるのだろう。

ふと、一つ思ったことがある。今回見た5作品はすべて代表的な原爆映画であるというが、どれも古い作品ばかり。その時、その時代でその時代の顔の役者さんによって戦争映画がつくられたら若い世代の人々もたくさん作品を見るのではないだろうか。ハリウッド映画やヨーロッパの映画では事実をもとにした戦争ものをよく見かける。実際の戦争そのものではなくその中での友情や恋愛を描いたものなどである。自国と相手国での解釈の違いで賛否両論なこともしばしばだが、日本でこのような作品を見ることはあるだろうか。私は見たことがない。原爆をあくまで背景にした友情物語、恋愛物語でもこういった事実が過去にあったということを若者に効率よく伝えていくには効果抜群ではないだろうか。人気のある役者さんがキャスティングされればなおさらだ。たとえ役者を見ることが目的であっても何かしら感じとるものはあるだろうからだ。

実際、今回の作品を家で見ていると母親が「あら、○○さん懐かしい。若い！」と言っていたし、黒い雨では私たちでも知っていて今も活躍されている役者さんが出てきたのでそれだけでも興味が沸いて見やすかった。このように、時代や世代の変化に伴って代えるものは代えていくべきだと思う。古い堅いイメージを少しでも減らすことで浸透していけばな、と思う。もちろん、それ以前に私たち自らが少しでも吸収しようと積極的になることが大切であると思う。今回のように、自分からではなくともこういったきっかけで改め

て考えてみる機会が持ててよかった。（ｆ４）

○とりあえず、『黒い雨』、『原爆の子』、『はだしのゲン』、『ひろしま』、『ゴジラ』の順でビデオをみてレポートを書いてきたので、そのレポートでの私の視点がどのようにかわってきたかを簡単に追ってみようと思う。

『黒い雨』をみて感じたことは、とにかく原爆というものが与える肉体的・精神的ダメージの恐ろしさだった。原爆というものはその場限りの破壊だけに留まらず、生き延びた人の体を放射能で蝕み、さらにはその精神までも冒していく恐ろしい兵器であるということを、映像によって改めて確認させられた。そして、このような兵器を使ってまで主張する戦争の正義というものにどれほどの意味があるのか、という疑問を強くもった事を書いた。この時点で私が注目していたのは、主に「不必要なまでに強力な兵器である原爆を使用した側でありつまり加害者であるアメリカと、落とされた側である被爆者」という構図であったと思う。

次の『原爆の子』でもその視点はあまり変わることがなかったようで、原爆によって人々の人生がよりひどい形で狂わされてしまったことについての憤りとでもいうか、とにかく原爆を落とした側であるアメリカの人々はそのこと理解しているのか、などといった点に気が向いていた。また、このときは被爆した少女がキリスト教の神に祈りを捧げていることに皮肉めいたものを感じたのを、今でもしっかりと記憶している。

その視点がすこしかわってきたのは、『はだしのゲン』からのようだ。焦点が『原爆』というものから、『原爆を含めた戦争』ということに明確に移ってきている。すでに、原爆がテーマの映画を見ることにそうとう嫌気がさしてきたことが間接的に関わっているようだが、こういうものを見続けていると嫌になるその理由ということを考えたことも、視点の移動に一役買っているかもしれない。また、この頃から『核抑止力』について触れるようになってきている。

そして『ひろしま』である。このビデオでは今までのビデオで初めて、被爆しなかった人による被爆した人に対する差別について触れており、ややショックを受けた。もちろん、原爆が投下された地である広島でこうも明らかな差別があったということを完全に失念していたことに対してショックを受けたわけだけれど、それだけではない。広島であっても、人々の置かれる立場は『原爆投下による被害者』というものだけではないのであって、それはあるいはアメリカの人々も動揺であるかもしれないということに、いまさらながら気づいたためでもあった。また、そのことに気づいたのには冒頭のラジオ放送の内容も強く影響しているように思う。

最後の『ゴジラ』になると、この映画の設定によるところも大きいが、「原爆を落とした側」とか「落とされた側」といった概念がすっぱりと消えてしまっている。映画の内容上、制御しきれないほどの兵器を用いることのリスクなどについての話が大部分を占めている。

そもそも、私はもともと「本物の」戦争に対しては否定的な人間なので、こういう映像資料などをみれば「被害者」とか「兵器の持つリスク」とか、そういう戦争のマイナス面に目がいくのが当然というところか。（ちなみに、ファンタジーとかＳＦとかで戦争を扱っているものはすきだったりする。）実際、戦争の経済的な効果であるとか、思想の問題であ

るから避け得ないとか、そういう正当化を試みたところで戦争が殺人から成り立っている事実に変わりはない。そういうことを踏まえた上で、早い話自分が人を殺し殺されという環境に置かれることが嫌なのだ。戦争になって、国とか組織に強制されるまま人を殺すなどさぞかし後味の悪いことだろう。まして、自分が殺されるなど論外だ。自分の手で殺すにせよ爆弾のスイッチを入れるにせよ（逆に殺される場合にも）、そもそも戦争そのものが起こらなければ、そういう不愉快な事態にも遭遇しないですむのだから。

ところで、私は「戦争反対」や「原爆反対」など、そういうことを世間にアピールする活動には参加したことがない。８月６日の広島平和公園での行事であるとか、どこかの国が核実験を行ったときに平和公園での座り込みとか、具体的にはそういうものになるだろうか。参加したことがない人間が偉そうなことを言うのはどうかと思わないでもなく、また言ったとしても説得力がないことはわかるのだが、ああいう活動というのは「平和な世界」というものを実現するための手段としては、どれほどの効果をあげるのだろう。

たとえば、今回私たちが見たビデオなどを見れば、原爆の威力のすさまじさや盛業の難しさはある程度想像できる。語り部の方々の話を聞けば、戦争を体験するということがどれほどつらいことか、その一端を知ることはできる。しかし、平和公園に座り込んだ人々をみて、戦争をしらない私たちのような人間が「あぁ、戦争というものは大変なものだなぁ」と思ったりするものだろうか。この場合だと、確かに核実験に反対している人たちが確実にいることは示し得るからまったく無駄なことではないのだろうが、しかしその行為から「平和へのメッセージ」を受け取るためには、結局誰かの言葉で「あの人たちは、核実験が平和を脅かすことを恐れて座り込みをしているのだ」といわれなければならないし、しかもその姿をみても「何故核実験がいけないのか」ということを理解することはできないのではないだろうか。自己満足、と断じてしまうのはあまりとは思うが、それに近いのではないかという考えが頭をかすめないではない。

原爆の被害に直接会っていないアメリカでは（あるいは日本でも地域によっては）、当然原爆の恐ろしさというものが広島ほど知られていないはずで、例えば「パールハーバー」のような映画が普通に作られるというのもそういう経験の違いからくるものではないかと思うのだ。そうだとすれば、その原爆の恐ろしさをより人々に知ってもらうことが核廃絶のためには絶対に必要なことであり、ただ座り込んでいるだけでは核廃絶はいつまでも進まないままなのではないだろうか。

原爆を使うということは悲惨なことで、悲惨である戦争が更に悲惨になるような代物であることや、それを使った方と使われた方でずいぶん立場に差がある。その立場の違いはどうしようもないもので、その差を埋めるためには原爆を使われた側が「原爆の悲惨さ」を使った側に向かってアピールするしかないと思うのだが、それを伝えるというのは「人が苦しんだ」という事実を伝えるということではないか。だから、本当に核を廃絶したいのならば、戦争というものを根絶したいのならば、その悲惨さをいかなるかたちでも後世の世代に伝えていくことが必要なのではないかと気づいた、ということで今回のレポートを閉めたいと思う。（ｍ１）

○これまで見てきた五つのビデオが何を伝えようとしていたか自分なりに考えてみると、

ゴジラは、新しい兵器を作り出す事の責任と怖さ。黒い雨は、たった一つの原爆によって被爆した人の人生がどれだけ台無しにされるか。原爆の子は、被爆した人が自分の存在を忘れられる事をどれだけ恐れているか。また、原爆で何もなくなった町で生きていかなければならない惨めな生活をする子ども達。ひろしまは、原爆を含めて戦争がどれだけ悲惨かと言うことを忘れてはいけないということ。はだしのゲンは、被爆者の差別や被爆した個人だけでなく、死人であふれた広島の惨劇だったのではないかと思う。

水爆実験を繰り返した結果現れたゴジラを倒すために水爆よりさらに強力な兵器でゴジラを撃退する事は、社会にその水爆を超える威力を持つ新しい兵器ができた事を発表してしまう事になり、兵器として本格的に使用されるとさらに多くの人が死んでしまうのは、簡単にわかる事だ。しかし兵器開発というのは、人をより効率よく殺す事を目的に新しい兵器を開発していくのだろうから、そこに人を殺してはいけないとか、その兵器を使用する事でどのくらいの被害が出るからその被害にどう対応するか。などを考える道徳心を排除されているのだろう。芹澤博士は、自分の開発が道徳心を排除した空間で兵器として活用される事を恐れてゴジラとともに死んでしまった。兵器一つを開発し、それを使用するにいたるまでは、本当は、これくらいの葛藤がなければならないのだと言う事を感じた。

兵器を使用するのに道徳心が取り除かれていると一番感じたのは、黒い雨の中の「アメリカ大統領が、正義のためなら原爆の使用もやむをえない。と言っていた」とラジオのアナウンサーが言ったセリフだ。一発の爆弾の爆発で多くの人間を殺し、さらにその中に含まれる放射能によってもっと多くの人を殺すような平気を使っておきながら、「正義」の一言でその使用を全世界に肯定させようとするのだから、「正義の戦争より、不正義の平和の方がマシだと言うのになぜ気が付かない。」といった重松の言葉の重さを感じる。

原爆が落ちて何もなくなった町で、生きていかなければならなくなった広島の人たちを取り上げた作品がいくつかあったが、原爆の子に出てくる子どもの様子は、惨めな生活をしているにもかかわらず、とてもたくましく生きているように感じた。また、はだしのゲンのゲンは、何か寂しい事が身の回りで起こってもあっという間に立ち直るタフすぎるくらいのたくましさをもっていた。広島を復興させていった原動力には、子供時代に鍛えられたたくましい精神があったのではないだろうか。なにもかもが吹き飛んだ広島の町を復興させるのは、かなりの忍耐力を必要としたはずだとおもう。

戦争は、多くの人が死ぬとても恐ろしいものだと大多数の人は思うはずだが、今日の日本で戦争をテーマにした映画やアニメは、かなりたくさん存在する。しかし、残念ながら今回研究課題になったビデオのように、戦争の悲惨さや恐怖と言ったものを伝えるものは、とても少ないのではないだろうか。今日作られる戦争映画は、自分の信じる正義のために爆弾がそらから降り注ぐ中懸命に走り抜け、戦火をくぐるような戦争する人間を格好良く描いた作品がほとんどのように思う。最近ハリウッドが作った「パールハーバー」と言う映画なんかは、その部類ではないだろうか。僕は、この映画は、新作映画を紹介している番組で取り上げられた時のコメントを聞いただけなので内容は、よく解らないが、なんでも真珠湾を日本が攻撃してきた事を取り上げ、その中で男と女が出会うラブストーリーだと聞いた。真珠湾を日本が侵攻した時に日本の町のように多くの人が死んだはずなのである。当時のアメリカもこの日本の侵攻に奇襲だなんだと散々騒いだと聞いているが、その多くの人が死んでいった悲惨な出来事の名前を冠するタイトルで、戦争の悲惨さを訴える

映画ではなく、戦争をいかにも格好良く描いた映画が良く作れたものだと思った。そして今この映画は、日本でもかなりの人気だと聞いている。本当の戦争を体験した人達は、この事を一体どう思っているのだろうか、僕は、東映あたりが「ワールドトレードセンタービル」ってタイトルで今回のアメリカとタリバンの戦争の引き金になった航空機テロの映画でも作って見たらどうかと思う。航空機テロによって燃えさかる貿易センタービルを脱出しようとする男と女が力を合わせることで愛が芽生えるのである。こんな作品をもしアメリカの人達が知ったら、間違いなく国交に支障をきたすだろう。しかし、日本では、あの真珠湾攻撃を取り上げた映画が若者の間ではやってしまうのだ。「ひろしま」の感想にも書いたが、日本がではなく、広島に住む人たちが、戦争の事を忘れつつあることは、やはり、とても危険な事なのではないだろうか。近年作られる新作の戦争を取り上げた映画のほとんどが戦争を格好良く描いている中、本当の戦争がどんなに悲惨だったかを知らない人達がそんな映画を見れば、「戦争は格好良い。」と思い始めると、それでなくともボタン一つでミサイルが飛んでいく今日、さらにたくさんの人がゲームのように殺されていってしまうと思う。

僕達の年齢層は、戦争を直接体験してはいないが、戦争の悲惨さや原爆の脅威は、知っておく必要があると思う。そのため小学校などで平和教育と言って先生たちが一生懸命いろいろな資料を使ったり、わざわざ戦争を体験した人を学校に招き話をしてもらっていたのだろう。しかし、残念ながら平和教育を熱心にしている学校は、他県では、少ないのではないだろうか。そして、広島県内で平和教育をしている学校でも戦争の事を思い出すのは、その日くらいのもので、次の日からは、いつの間にか忘れているのではないだろうか。こうやってえらそうな事を書いている僕も、8月の6日に平和公園でやっている式の中継をテレビで見ているときは、戦争のことを考えたりしながら黙祷をするが、次の日には忘れているのが現実だ。戦争の恐怖などは、その場だけでなくいつも解ってなければならないと思うのだが、それはやはり難しい。とにかく僕は、原爆の知識を僕達の世代はしっかりもっていないといけないと思う。

僕は中学生の時に文化祭で原爆に多少関係のある演劇をやった。ギリシャ神話がベースで、プロメティウスが人間に火を渡し、それによって人間は文明を発展させ、原子爆弾を作りあげ、これを広島と長崎に投下する。神の国でその光を見て驚く神々にプロメティウスは、「あれは偉大な核の火だ。」と言って核兵器を開発した人間たちを誉めるのだが、インドからは釈迦が、そして広島からは、安芸のみことがきて、広島や長崎の惨劇をプロメティウスに訴える。そして核の火に焼かれた人間の幽霊が恨めしそうにプロメティウスにまとわりつきあまりの恐怖に自分が誉めていた核兵器は、使用してはならない物だと悟り、ゼウスの命令を受けて核の火を人間から取り戻すために下界に下りると言う所までのストーリーだった。当時は、「あのクラスは、友達との友情だし、このクラスは、人との信用をテーマにしているのに何か自分のクラスのテーマは、ちょっと文化祭でやる劇のテーマにしては、重すぎてないか？」と思っていたが、今考えれば、そう言った身近なイベントからでも平和教育ができれば少しずつでも知識はついていくのではないかと思う。

今回これらの映画を見ることで戦争と原爆の悲惨さを伝えていく事は、とても大事な事だと思った。そして、誰もが思う事なのだろうが、戦争は、やはりいけない事なのだと改めて感じ、戦争の事についてもっと色々と考えるようにしようと思う。（m２）

○正直、全部観終えてまず思ったのは「やっと終わった」でした。ある程度覚悟はしていましたが思った以上に重く暗い内容のものが多くて、作品によっては気が滅入ったり落ち込んだりもしましたし、感想を書きづらく感じるものもありました。『ゴジラ』に関しては比較的興味関心を持って観ることができたのでよかったのですが他の四本、特に『黒い雨』や『原爆の子』などにはかなり悩まされました。しかし今回の機会を通して多くのものを得、新しい価値観を発見することができとても有意義だった、というのもまた一つの感想です。

順を追って言えば最初に観た『ひろしま』。白黒での映画を観ることが久しくなかったので少し戸惑ったのを覚えています。作中に幾度となく出てくる自分の住んでいる街の地名や場所、焼け野原になった街並みの映像に違和感を覚えながらも改めて広島が「被爆都市」だということを再認識させられました。次に観た『ゴジラ』には、「核における人類への警鐘」といったものはもちろん、それだけではなく人類のオーバーテクノロジーに対する考え方の再確認、またそういった物を作り出した科学者達の心情のようなものに触れられたような気がしました。『黒い雨』に関しては正直言って、内容的にはあまり納得していません。ですが「映画を観る意味」ということに関して、特に資料映画の意義について少し考えさせられたとは思います。それはこれまで映画は楽しむため、娯楽の一つだと考えていた自分にとって新しい発見でした。『はだしのゲン』は多分自分がアニメで観た初めての原爆資料映画でした。それだけに新しい発見も多かったと思います。原作に関しては小学校の時からとても馴染みのあるものだったにもかかわらず、とても新鮮な印象だったのを覚えています。「漫画」と「映像作品」というそれぞれのメディアについて、またそれらの持つ力や影響力について、考えさせられた作品でした。最後の『原爆の子』は、感想を書くのに一番悩まされた作品でした。それは、その作品に受けた影響が少ないという訳では決してありません。むしろ、被爆者や原爆で親を失った子供、いわゆる「原爆に人生を狂わされた人達」を擬似的にでも客観視することで、彼等の想いや苦しみ、そういったものについて深く考えさせられたと思っています。何故感想を書きにくかったのかは自分でもはっきりわかっていませんが、この作品の内容に何か引っかかるものがあったからなのではないか、と自分は考えています。

こうして振り返ってみただけでも、これらの作品に多くのものを教えられ考えさせられたのだと改めて思わされます。映画は観る人に何かを与えてくれる。自分はそれが「感動」や「興奮」、または「爽快感」、いわゆる「娯楽」としての面が大きいと思っていました。ですが今回の機会で、映像作品が自分たちに教えてくれるのはそれだけではないと気付かされました。もちろん前述した通り、そのことに気付いたことも含めてです。

その中でも全作品に共通して感じたこともいくつかあります。一つは一言で言えば「時代の相違」です。単に作風が古いとか撮影技術についてだけという訳ではありません。もちろんそれも要因の一つですが、それ以前に作品中の登場人物、つまり「戦時中もしくはそれ前後の時代を生きる人達」の心情を、戦争を経験していない自分たちは真の意味で理解できないかもしれないということです。私たちは戦争を経験していません。自分たちの中の戦争の恐ろしさも悲惨さも全て、いままで聞いた戦争についての話、これまで観た映

像作品や文学作品及び戦争資料によって「植え付けられた」ものといっても良いのではないかと思います。よく年配の方が若い人に「今の世代のやつにはわからんだろうなあ」ということがありますが、実際自分にも「食糧難」とか「戦時中」についてピンときません、「日本にもそんな時代があったんだなあ…」とむしろ信じられないような感覚です。そんな自分たちが何十年も前の映画を観て、その時代の人の心情や考え方をうまく理解することはとても難しいことではないでしょうか。一番そのことを感じたのは『黒い雨』を観た時です。彼らが何を考えているのか、どういう気持ちなのか、自分には解らなかったかもしれません。「死を前にした気持ち」を今の自分たちが理解できるとは思っていませんが、それならそれでもう少し、登場人物の心情を読み取りやすい手法が必要なのではないかと自分は思います。今の若い人は戦争から離れた生活を送っています、おそらく現代世代の人でこういった機会以外、つまりプライベートや興味で戦争資料映画を観ようと思う人は少ないでしょう。そういった人達に戦争の恐ろしさを伝えてこその戦争資料映画だとしたら、もう少し戦争を知らない世代への配慮が必要なのではないでしょうか。

もう一つには、少し前述しましたが「映画を観る意義」についてです。自分は、映画はエンターテイメントであり観る人を楽しませるものだと、そう思っていました。そう決め付けていたからこそ、だからこそ納得のいかないラストや理解できないシーンを観た時製作者の意図を計りかねていたのではないかと思います。どんな映像作品でも、観る側に伝えたい「何か」があるのだと思うようになりました。もちろんそれは作品によってそれぞれです。しかし特に資料映画にはまたその中でも限定された意図があります。今回そのことについて考える機会に触れることができたことは、自分が今後映画を観る上でも一つの転機なのではないかと思います。

戦争というものについても考えさせられました。自分に「何故日本とアメリカが戦争することになったのか」という大切な疑問を持つきっかけをくれました。「今も世界のどこかで戦争が起こっている」という事を聞いても実感がわかないのはしょうがないことだと思っています。しかしだからといって他人事として考えるのではなく、自分にできることについて考える、その心持が大切なのかもしれないと思うようになりました。

自分は広島に住んでいる人間として多少なりとも戦争、特に原爆に関してわかっているものだと思っていましたが、今回のことでまだまだ知らなくてはならないことが多くあると思い知らされました。戦争・原爆のことだけではなく、今回の機会で学んだことは数知れずありました。これからもこういった機会に積極的に触れ、広島に住んでいる人間として少しでも自信を持てるようになりたいと思っています。そして他の国の人や自分より小さな子に聞かれた時正しい答えを返せるようになりたいと、そう思います。（ｍ３）

○映画『黒い雨』は、広島に原爆が投下されたことによって生じた、原爆症で亡くなってゆく人について多く描かれていた。しかしこの映画で特徴的だったのは、村の人々とのやり取りや、家庭内で生じている問題についても少なからず考えさせられることだと思った。田中好子演ずる矢須子は、放射能を含んだ黒い雨に打たれたことによって、尽く結婚をする機会を逃した。それについての噂はあっという間に村中に広がり、村の女集は陰口を叩いていた。また重松家では、北村和夫演ずる静馬の、矢須子にそっくりで亡くなった姉に

ついてコンプレックスを抱いていた市原悦子と、姑とがギクシャクした関係にあって、映画の内容を色濃くしていた。しかし、私は原爆によって生じる問題よりも、こういった主題から外れていて、だが昔を知る上では大切な要素である、これらのコミュニティや家族の問題の方に関心が移ってしまって、内容を把握するのに混乱してしまった。また重松家の隣に住んでいる一家の長男・ユウイチが、家の前をバスやバイクなどが通過しようとすると、そのエンジン音に敏感に反応して、棒のようなもので攻撃したり、車輪を停めようとする異常な行動がとても印象的だった。普段は何ら普通の人と変わりはないのだが、戦争出兵経験から、その時の鮮烈な恐怖感や義務感からこういった症状が現れていると知り、衝撃を受けた。

『原爆の子』は、広島に原子爆弾が投下されてから６・７年経過した後のエピソードであり、イシカワタカコという小学校の教師をしている女性が主人公であった。大島に住んでいるタカコが四年ぶりに故郷の広島へ帰郷するという始まりで、彼女が広島へ帰郷して再会する何人かの人々との関わり合いから、改めて原爆や戦争について考えさせられるストーリーであった。終戦を迎えてもなお、原爆症やその他の身体の疾患、精神的ダメージを拭い去れない人々について語られていていた。そして１９４５年、８月６日の悲劇を決して忘れてはいけないというメッセージが込められている。そのメッセージが強く読み取れたのは、冒頭の辺りのタカコが広島へ帰郷する途中船から見える青空と、最後にタカコとタロウが大島へ出発する前に港から見ていた青空であった。戦争を知らない私は、岩さんやその他の人々の７年間を、タカコの視点を通して垣間見ていたような気がした。タカコが映画の中で感じていることは、そのまま映画を観ている私の中に沸き上がってくる感情と同化しているようだった。

『ひろしま』では原爆によって足を不自由にしてしまった女の子が、ユキオに「嫁さんにしてやる。」と言われて傷ついている様子を見たが、私は彼女が理由を述べるまで、どうして求婚されているのに嫌そうにしているのか、よく理解できなくて印象に残った。彼女は足を不自由にしているので、結婚は諦めていると言っていた。しかし、結婚に対する憧れの気持ちは拭いきれずにいるので、軽はずみに結婚について語って欲しくないようだった。不意に、『黒い雨』の原爆の放射能を浴びて結婚を諦めていた矢須子（田中好子）を思い出した。現在では、一生独身でいることも良しとする選択肢も定着しつつあるが、昔は年頃になったら、女性はお嫁に行くことが当たり前のような時代だったので、結婚を諦めるということは、現代よりも辛いことのように思われる。広島の町に落とされたたった一つの爆弾が、多くの人の命だけでなく、人生を歩んで行く上で大切な夢や希望までをも喪失させてしまったのだと感じた。広島に原爆が落とされたことによって生じる問題は、人が亡くなって悲しいとか、肉体的な苦痛があるとか、そういう表面的なことだけではなくて、もっと根深いところまで浸透しているということが、改めて分かったような気がする。

『はだしのゲン』はアニメーションで、子どもに返ったような気持ちになれて、とても観やすい映画だった。この映画は原爆を題材にしているにも関わらず、『黒い雨』や『原爆の子』、『ひろしま』、『ゴジラ』のように一貫して暗い雰囲気の漂う内容にはなっていなかった。その理由の１つには、この映画がアニメであって実写ではないから、映像やストーリーの内容がリアルには伝わらないということがある。しかしこれだけでは不十分である。まず、重苦しく感じるはずの原爆を題材とした内容が、アニメとしての登場人物の描き方

自体（彼らの表情、動作、声、話し方など）によって、打ち消される仕組みになっていた。さらに、私は原爆を題材とした作品とは、真面目に人々に訴えかけるような内容であるというような観念があったが、この作品には、人を笑わせることを狙いとしている内容も要所に散りばめられていた。私はこの映画が、多くの人に親しまれ続けているのは、ゲンとシンジ（ゲンとリュウジ）という登場人物がいるからだと思っている。この映画ではゲンが主人公だが、もしシンジがいなければこの２人が映画を面白おかしくする要素はなくなるので、他の原爆を題材にした映画と、そうは違いが見られなくなると感じている。

私は『ゴジラ』を観るまで特撮アニメ映画というのは、「容易にストーリー展開の予想がついてしまって面白くない」とか、「子どもが観るもの」という観念があった。しかし『ゴジラ』はゴジラが主役の物語ではなく、芹沢博士という一人の科学者のドラマであった。芹沢博士は薬物化学の研究者で、彼は水中の酸素を集め破壊しあらゆる生物を窒息死させる「オキシジェン・デストロイヤー」を発明してしまった。彼は当初、ゴジラが暴れているときに彼が発明した兵器、オキシジェン・デストロイヤーの使用を頑なに断るが、彼はゴジラが繰り広げる目の前の惨状に苦悩し、そして物語の終盤、彼はオキシジェン・デストロイヤーを使用することに同意した。そして、オキシジェン・デストロイヤーと共に、自ら自殺をした。私は芹沢博士の人生を垣間見て、原爆の開発に関わったことを激しく後悔し、戦後は死の直前まで核兵器廃絶を目指して行動し続けた、アルバート・アインシュタインと非常に似ていると思った。愚かな人類が水爆実験を繰り返すことによって生み出してしまったゴジラによる惨劇、世間に背を向けてまで開発した研究が、兵器と化してしまう恐れを悟り、自身ともに葬り去ってしまう芹沢博士の悲劇、そしてこれらに込められた、自らを滅ぼしかねない愚かな人類への警告と、科学は人の役に立つものでなくてはならないというメッセージこそ、本来「ゴジラ」が伝えてくれるものなのだと実感した。

私は去年の夏、１年も前から楽しみにしていた、映画『パール・ハーバー』を観に行った。その頃も、この５本の映画を観る前も、第二次世界大戦にしろ、その他の様々な戦争にしろ、戦争をしてきた国々はみなそれぞれに、戦争を起こさずにはいられないような要因があって、戦争が起こること自体、どうしようもないことであると思っていた。今回、米軍によって広島に原爆が投下されたことを題材にしているこれら５本の映画を観ると、やはり自分は日本人なので、「どうしてあのように２０万人もの人命を奪ってしまうような恐ろしい原子爆弾を、広島に投下しなければならなかったのか。」と問いたくなる。米を責めたくなる。原子爆弾による放射線を受けて、その後何十年経ても回復しないような放射線障害を受け、今でも苦しんでいる人々もたくさんいる。また、身体だけでなく心を病んでいる人々も数多くいる。しかし、『パール・ハーバー』を観たときも、米人に対しても同じような感情を持った。もちろん『パール・ハーバー』では日本人が悪者として描かれているからなのかもしれないが、やはり一方を責めることはできないはずだ。私が『パール・ハーバー』を観に行ったことをある友達に話したら、「私は絶対観に行かない、日本人だったら観るべきではない」と言っていた。だが、私たちの世代は当時を実際経験していないし、いずれそういった体験のある人々のいない世の中になってしまい、経験者から当時を知る術はなくなってしまう。だからこそ映画というものを通して、歴史上の出来事を学び、戦争を無くさなければならないことや、人の命の尊さにつ

いて深く考えなければならない。私たちには過去を知る義務があり、それらを未来の人々へ伝えて行く責任がある。（ｆ５）

○今回この五本のビデオを見て、いろいろな事を考え、勉強になった反面すごく辛かったです。私の知らない事、知っていたつもりが事実と違った事、いろいろありました。戦時中を生きた人の気持ちは彼らにしか分からないと思うけど少しは理解できたかな‥。最近は修学旅行のシーズンなのかよく見かけますが、原爆ドームや資料館、被爆建物を見学している子供達をよくみかけます。彼らもまた事実を学び、歴史は語りつがれていくのだと思います。最近、本通りにあるアンデルセンが被爆建物であることを初めて知り驚きました。広島で暮らしていても知らないことも多くあると思います。このアンデルセンも老朽化が進み、補強工事が行われていました。こうやって保存していくことも、ただあるだけでなく利用されているのも良いことだなぁと感じました。直接触れ合うことで人の心に忘れることなく残っていくのだと思います。

私が中学生の時は、鹿児島の知覧について学びました。そこもまた広島とは違った歴史があり今でもよく憶えています。あまりに悲しく、残酷な事実だったから。特攻隊の話しでした。片道分の燃料だけを飛行機に積み、敵艦に体当たりしたと言う悲しい事実です。そんな彼らの写真と最期に愛する家族や恋人に宛てた手紙を見ると涙が溢れて止まりませんでした。それも多くの人がそんな風に国のために勝利を信じて、しかもそうやって死んでいくことを名誉だと思いながら突っ込んでいったのです。とても信じられなかった。国が、政府が意地を張り情報を操作して国民に勝利を信じさせ最後まで戦い続けたなんて。死ぬことは誰だって恐いのに、それを表にだしたら非国民と罵られ差別され迫害され、自由もなかった人々。しかし、歴史は正しく学ばなければいけないと思う。戦争で犠牲になったのは日本人だけではない。一方的にやられたわけじゃないし、日本人だって他国の人を虐殺したりひどい事もした。第二次世界大戦だって、アメリカのパールハーバーに奇襲攻撃をしかけ多くの命を奪ったし、戦時中も朝鮮なんかで虐殺もした。それらすべてを事実として知らなければいけない。そしてどこの国においても、その中での一番の犠牲者は子供達だと思う。何も分からないのに戦地へ行かされ戦いに参加させられたり、食べる事も寝る事も学ぶ事も、結果的には生きる事さえ困難を強いられた子供…。大人たちが、それも一部の人間が始めた大きな大きな喧嘩に巻き込まれてしまいどんなに辛かっただろう。今現在生きている戦争の体験者は、当時は子供だった人ばかりだろう。私なんかは、５歳や１０歳の頃の記憶なんてあやふやだけど今の年配の人、特に戦時中の生まれの人は一生忘れたくても忘れられない子供時代なのかな。そんな戦争体験者や広島の原爆経験者もあと何年かしたら一人もいなくなってしまうだろう。事実を体験した人と言うのは貴重な存在だと思う。だからこそ今のこの時代に色々な事実を知っておくべきだと思う。歴史を誰もが正しく語りついでいくために。

映画を見ることで原爆と言うものの恐ろしさを改めて感じました。逃げ場なんてないし、一瞬の内に自分が、回りが壊れて崩れてしまうなんて想像できない。それまで生きてきた人生全てが、形から崩れていってしまう。そして万が一生きのびてもその後の人生にも明るさは見えるはずもなかった現実。そんな事は今の私には想像できるはずもない。だって

体験していないのだから。だから私が戦争について偉そうに語ることはできない。考えるべき事はそんな犠牲になった人々のためにももう二度と戦争を引き起こしてはならないと言うことなのかもしれません。でもだからこそ事実を知る必要がある。ねじ曲げられた歴史ではなく本当の真実を。原爆と言うのはいろいろな人を苦しめた。病気になって長い間苦しみながら亡くなった人、子供が欲しくてもかなわなくなってしまった人、放射能により体が焼け見た目で迫害された人、何より一瞬の内にすべてが焼け家も食料も家族もすべて奪いとられてしまった人。考えたらきりがない。戦争は後に何も残らない。アメリカが作った原子爆弾は世界中が恐怖に震えただろう。アメリカは莫大な予算と人員をつぎ込んで作りあげた実験なのだから使って成果を見ないと意味がなかったのだと思う。日本は敗北を認めずかたくなに戦い、国民だって勝利を信じて戦う事をやめなかった。なにより情報が操作され正しい現状と言うのが見えていなかった。だから良いターゲットになった。広島に投下したのち、アメリカは調査に訪れている。悪く言ってしまえば実験成功といったところだろうか。こうなってしまう事は分かっていたのか、それとも予想以上だったのか。

私の祖母も原爆を体験している。さいわい爆心地からは離れていて、今でも元気に生きている。しかしその祖母から母が生まれその母から私が生まれたのだから私にも原爆による何らかの血が流れていてもおかしくない。母の姉、私の伯母にあたる人は数年前にガンで亡くなった。それは原爆とは関係ないけど、伯母は原爆手帳と言うものを持っており、それは原爆をうけた人に与えられる医療費の優遇制度みたいなもので、長い間の入院費用、たくさんの手術、莫大な薬などすべてが無料になるというものだった。実際伯母は発病してから亡くなるまでお金はほとんどかかっていない。それが国の精一杯の罪滅ぼしなのかもしれない。しかしその手帳をもらうにもいろんな審査があるみたいで、今なおそのことでもめている人もいると聞く。だから正しい審査が問われるし、もちろん不正は許されない。

広島にいながら私にとって原爆や戦争はあまり身近なものじゃない部分もある。普段はぜんぜん考えないし、こういう機会があった時に考えるだけ。その機会も学校教育の中にあるものだから、卒業して社会にでてしまったらこう言うことってまったく考えなくなってしまいそう。そう言う機会がなくなると思う。しかしそのことに疑問はないし、それが駄目とも思わない。ただ、それまで学んだ記憶を忘れなければいいと思う。例えば、将来子供が生まれたとして、その子が疑問を投げかけてきた時に何も知りませんじゃいけないと思うから。私は今幸せに生きている。けど世の中では、無駄な殺人事件など無意味なことが多く起こっている。若い人が罪をおかしたり、そんな汚いと言うか、すさんだ世の中になぜなってしまったのだろう。何もない日常ってつまらないのかな？でも毎日違うし、同じ一日なんてありえないのだから、日々の生活を一生懸命いきていけばつまらないなんてことないと思う。戦争を経験している人から見れば今の世の中っていうのはどんな風に見えるのだろうか。

今度日本と韓国の共催でサッカーのワールドカップが行われる。近くて遠い韓国と。日本は韓国に対してひどいことをしたし、それは永遠に消えることはない。けどスポーツでわだかまりが少しでも消えればいいと思う。スポーツの世界では他のなにものでもない強さが全てだから。国同士の争いだけど、綺麗な戦いだし、勝ち負けでその国の順位が決ま

る訳じゃないから。いっしょに手を取り合って開催していい方向にいけばと思う。それですべてが解決するわけじゃないけど、今後いい関係が生まれればいいと思う。

今私がしなくてはいけない事、知るべきことって何だろう？でもひ弱で小さな私はきっと何もできない。でも学ぶことはできる。色んな事実を知り、考えることができる。それはきっとすごく大事なことだし、しなくてはいけない事だとも思う。過去のわだかまりをすて、変な価値観や先入観にとらわれず人と付き合っていけたらきっと世の中少しはよくなるだろう。自分本位ではなくいろいろな人のことも考えながら物事を見つめたい。自分が幸せに、世界のすべての人が平和に生きていくために。（ｆ６）

○映画の感想文を書くという作業をしてきたわけだが、正直言ってとても疲れた。今までに、ヒロシマの原爆について考えたことがあったのは、７月～８月にかけてであった。７月は小学校・中学校の頃は、そろそろ原爆の日が近いからということで勉強とかさせられていた。

８月は、もちろん８月６日のことであるが、この日は絶対と言っていいほど登校日で、原爆のビデオや資料を見せられていた。８月９日はナガサキについても考えていた。あと、被爆した方の話も聞いたことがあった。

ヒロシマの原爆のことを１年間通して考えたのは初めてだった。白黒の映画を見ることに戸惑いながらも、がんばって映画を見てそして、がんばって感想文を書いた。私が見た５本のヒロシマの映画について振り返っていきたい。

１本目は関川秀雄の「ひろしま」という映画を見た。この映画は、原爆の落ちる前のヒロシマ、原爆を受けているヒロシマ、原爆を受けてしばらく経った後のヒロシマを描いていた。原爆が落ちる前のヒロシマの場面では、人々に驚いた。男性、女性に交じって子供までもが働いていたからである。特に子供が働いていることに驚いた。小さい子供が働くということが今では考えられないから驚いた。今で言う幼稚園（保育園）～小学校低学年ぐらいの年齢の子供が働いていた。普通なら幼稚園（保育園）や小学校に行くのだが、家族のために働いていたので驚きとともに感心した。

原爆を受けているヒロシマの場面では、人々が苦しんでいることについて感じることがあったが、それ以上に人間性の問題について怒りを感じた。困っている人々に対して無視をする兵士がいた。被爆者を介護するのも兵士の仕事だが、落ち着かせるのも兵士の仕事だと思う。なのに、さらにパニックにしてどうするんだと私は兵士に対して怒りを感じた。

原爆を受けた後のヒロシマの場面に対しても怒りを感じた。被害を受けたヒロシマの街を修復していこうと協力する人もいたが、自己中心的な人は、自分だけお金を稼いでいた。これはしょうがないと私は思った。しかし、人間の骨を売ってまでもお金を稼ぎたいという考え方に腹が立った。

２本目に「ゴジラ」を見た。もちろんゴジラは知っていたが、何でこの映画を見ないといけないのか最初は分からなかった。なぜなら、私の中でゴジラというものは、他の怪獣と戦うというイメージがあり、原爆には一切関係のないものだと思っていたからである。しかし、映画を見ていくうちに、水爆実験が大いに関係しているということが分かった。

ほとんどが、ゴジラの暴れるシーンだったので感想が書きづらく、ほとんどが映画自体

の感想になってしまった。ゴジラは人間達に、このまま水爆実験を続けたら、自分達が危ないということを暴れる中で教えてくれていたと思う。それを、恩を仇で返すように人間達は、暴れるゴジラをデストロイアとかいう武器で殺してしまった。私は同じ人間として、この者達が行った行動はとても情けないと思う。

３本目は、新藤兼人の「原爆の子」という映画を見た。この映画は、原爆が落ちてしばらく経った後のヒロシマが描かれていた。原爆が起きた時の映画しか見たことがなかったので、原爆が落ちた後のヒロシマのことは知らなかった。だから、この映画を見て、いろいろ知ることができた。

その１つとして「ピカ」である。ピカというものは前から知っていたが、これは人々の体外に何らかの症状を出すものだと思っていた。しかし、ある女性が、今、子供が産めない体になっていると映画の中で言った瞬間、ピカは体内にも影響をもたらすものだったとここで初めて知った。

施設に預けられている子供達に、私は感心した。服も着ないで一生懸命働いていたので感心した。一生懸命働いても、５０円弱ぐらいの低賃金で嫌にならなかったのかと思う。たぶん私だったら、嫌になって逃げ出すかもしれない。

４本目に、今村昌平の「黒い雨」を見た。この映画も「原爆の子」と同じようにほとんどが、原爆が落ちてしばらく経った後のヒロシマを描いていた。あとこの映画には、恋愛・結婚といったような「愛」が関係する場面もあった。しかし、その愛には原爆が絡んでいて、とても複雑な内容だった。いざ結婚しようとしても、自分の娘はピカにやられているからとか言って結婚を許さない。私は、なぜ好き同士にもかかわらず結婚させないのか不思議だった。人を外見で判断してはいけないと思う。ある意味これは差別であり、２人が好き同士なら親はすぐに結婚を許してあげるべきではないのだろうか。

映画を見ていく中で、黒い雨は細菌と似ているものだと思った。なぜかというと、雨はヒロシマ全体に降り注ぎ、傘とかはあの時代にはないと思うし、原爆で建物を壊され、雨宿りするところもなかったと思う。よって雨は全員に降り注ぐことは目に見えている。一方細菌は、目に見えないので避けようがない。それに空気中に存在するので絶対人々に入ってくる。だから私は、黒い雨と細菌は似ているものであると感じた。

黒い雨にあたった人は、あたってから５年後ぐらいに症状が出ていて、田中好子もその１人であった。急に倒れて医者が運んでいったのだが、そこで映画が終わった。私はその後が知りたかった。田中好子は助かったのかとか、２人は結ばれたのかとか。中途半端に映画が終わったので、とても残念だった。

最後に、「はだしのゲン」を見た。私が最初に見た原爆映画である。初めの頃は、気持ち悪いとか思っていたが、今見ると、原爆について何か考えていかなければならないと思うようになってくる。

内容に関しては分かりやすく、なおかつ映像に関しては見やすいし、アニメなので子供達にもなじみやすいのではないかと思う。キャラクターにもそれぞれ個性があるし、効果音や場面ごとにＢＧＭを使っているのでとても分かりやすく、見やすい。原爆映画なのにそうではないような気がする映画である。

アニメの原爆映画を作れば、もっとたくさんの人がそれを見て、原爆について考えてくれると思う。外国版とかを作って、外国の方にも原爆映画を見てもらいたい。

５本の映画について振り返ってきたわけだが、名前を聞いたことがある映画は、「ゴジラ」、「黒い雨」、「はだしのゲン」の３本で実際見たことがあったのは、「はだしのゲン」だけであった。

感想文を読み返していく中で、ある共通点を見つけた。感想文の書き方が、今まで見た原爆映画との比較→映画自体の感想→印象に残っている場面で自分が思ったこと、考えたこと→最後に、映画を見て原爆に対して自分が望むこと、やっていかなければならないことという順番であった。５本ともだいだいそうだった。自分でも驚いている。

印象に残っている場面での思うこととは、人々に対して何か自分が思っていることがほとんどであった。例えば、こういう人にはとても怒りを感じるとか、子供達に感心したなどであった。

考えることというのは、もし～ならば～だったのではないかというような自分の想像したことで、それも良い方に考えを出していた。例えば、もし火を消す道具があればもっと多くの命が助かったのではないかとか、もし日本がすぐにアメリカに対して降伏していれば、ヒロシマ・ナガサキには原爆は落とされなかったのではないかなどである。

映画を見ていく中で、原爆について知らなかったことがたくさんあったし、まだたくさん知らないことがあると思う。これがきっかけで、原爆に対して興味がわいてきた。だから、もっともっと原爆について勉強していきたいなあと思った。（ｍ４）

○原子爆弾に関する映画を５本見て、私が感じたのは戦争というものは国と国のごく一部の人間の欲望や身勝手な行動によって引き起こされるものでありながら、大きな影響を受けるのはその国その国に住んでいる国民が一番被害を受けているという残酷なものであり、決して今後するものではないという事である。第二次世界大戦にしても、去年の９月１１日にアメリカで起きた同時多発テロにしても、ごく一部の人間が引き起こし、無関係である一般市民が一番多くの被害、犠牲を負っている。反対している市民の言動というものは完璧に無視され、政治家の考えがまかり通るというのは非常に理不尽であり、その慣例というものは日本に多く根付いていると思う。それは日本の政治的なものが非常に多いと思うし、それに従わざるを得ない国民がかわいそうである。

戦争というものは、国の機関や統制を奪うという事は分かりきっている事であるが、一般市民の自由を奪う事が一番大きなものである。原子爆弾というものは一瞬にして人間そのものを焼き尽くし、原子爆弾が投下された町というのは跡形もなく消えてしまう。人間の皮膚は溶け、目玉は飛び出たり、男女の区別も出来ないほどの威力を持っている。毎晩のようにある空襲警報に対する恐怖感や、Ｂ－２９の飛行する音に対しての不安感や苛立ちなど、当時生きていた人はすごく残酷な目にあっていることを再認識した。原爆が落ちてきた瞬間は、恐怖感と言うものは感じなかっただろうが、猛烈な放射能や、爆風、爆音、すさまじい熱風や炎など恐怖を感じずにはいられない状況である。熱風により、皮膚がただれて焼け焦げ、強烈な爆風により飛んできたもので怪我をしている。近くに建物があれば、爆風で割れたガラスの破片が体中に突き刺さったり、倒壊した建物の下敷きになったりと原子爆弾の被害に遭い自分が何をしているかも分からずに、ただ泣きながら、親を呼び、助けを求めている。また、人というのは自分が窮地に陥ったとき、周りは目に入って

いない。「自分が助かれば…。」という考えしかないであろうし、自分がその場にいたならば、まず周りは見られないと思う。どんなに子供が爆風で飛ばされ地べたで泣き叫んでいても、自分の命のために無視せざるを得ない状況である。自分の逃げ場を確保し、自分の生きる術を得る事で精一杯である。原子爆弾の投下の瞬間の恐怖感や威圧感というものは一生消えない傷となり、いつまでも人々の目に焼きつき離れてはいかないものであるだろう。人間の内側にある心の被害というものの方が目で見える被害に比べると大きいと思う。何かが光った拍子に、原子爆弾が投下された瞬間の目に焼きついたなまなましい光景が忘れられず、後遺症とともに一生付きまとうものであると思う。そのような原子爆弾の投下という事態に見舞われたヒロシマ・ナガサキという町は、苦しい時代を生き抜いたのである。日本の、それもヒロシマとナガサキという町はいまの日本を支えている部分というのは多くあると思う。最近日本では、大きな地震が多発しその都度、地震が発生した地域というのは大きな惨事に見舞われている。多くの建物が倒壊し、何百人、何千人という人々が亡くなったという事実がある。戦争というものは地震よりも大きな出来事であるし、復興していくには長い年月が必要である。一度、町全体が焼き払われると、今まで通り、完璧にもとに戻そうとすれば、相当な労力と時間とお金が必要である。しかし、広島では原子爆弾の投下という歴史的に見ても大きな出来事である状況の中でも、三日後には一部ではあるが路面電車が走っている。それは、復興を願う一部の市民の興した行動であり、その小さな行動ひとつで、広島に住む多くの人々の荒んだ心を晴れやかにしたことは明らかであり、原子爆弾投下という大きな惨事のトンネルからのヒカリである。そして、今でも、原爆を受け当時原爆直後に走っていたそれらの路面電車５台がいまでも広島の町を走り回り、活躍している。この路面電車の出来事を見ても、広島という町は原子爆弾の投下という出来事の中、町を復興させようとしていた人々により、目覚しい発展を遂げ今に至っている。そのような、世界的に見ても大きな出来事の遭った町である広島という町に住み、生きているということは戦争の事を分かっていないと恥ずかしいと思うし、原子爆弾を投下され大惨事に見舞われたということを分かっているということが当たり前であると思う。

また、現在の日本では平和を訴え、それぞれの活動をしている団体が数多く存在する。私のよく知っている団体は、原子爆弾を投下された路面電車のレールが敷いてあった敷石に平和の意味を込め観音像を掘り込み、多くの国の大統領や大使などの協力を得て、様々国に贈呈をし、平和を訴えている。その団体では、９０ヶ国近くの国に祈りの石を贈呈している。また、その活動は現在も続いており、世界で唯一の被爆国である日本からの平和の訴えを確認し協力してくれている。世界の多くの国が世界で唯一の被爆国である日本に興味を持ち、平和について考えてくれるということは非常に嬉しい事である。

今回のこの映画を見て感想を書くという活動を通して、戦争について改めて考え直させられたのではないかと思った。ヒロシマとナガサキに原子爆弾を投下された、第二次世界大戦に関する知識があると思っていたが、それは間違いであったし、これからあらゆる戦争に対して関心が出てきた。とても有意義な活動であったと思うし、自分のためになったのではないかと思う。これからも、戦争に関する文献や書物を読もうと思ったし、いろんな人に戦争に興味を持ってもらえればと感じた。（ｍ５）

○平和ボケした日本人とよく外国のマスコミに言われている現在の日本人。太平洋戦争が終わって五十数年、戦争を知っている人は減少するばかりである。

広島は人類がはじめて原爆を投下された都市である。他の県のことはほとんどしらないが、広島県は平和学習に力をいれているのではないだろうか。しかし、この平和学習をまともに覚えている若い人はどれだけいるのだろう。私の周りではとりあえずほとんど存在しないだろう。今現在も平和学習をしているのだろうか。小学生の頃の平和学習はさすがにまじめにうけていたが、まったく覚えていないし、中学生の頃、おそらく平和学習をしていたのだろうが、記憶に残っていない。高校生の頃は、呉空襲の日に平和学習をしていたのは覚えているだけだ。高校生の頃は、原爆記念日をも忘れてしまっていた。終戦記念日さえも今聞かれたら曖昧な答えとなってしまうだろう。

関心がないのではない。関心が持てないのだ。広島では原爆が身近にあると思われるが、近いようで、原爆の存在は遠い。他県の人ぐらい遠いものとなっているだろう。理由はたくさんある。まず、平和学習で平和の尊さを教える教員が戦争をしらない世代の人が多く、私の父 50 歳ぐらいの年代の人は戦後まもなくして生まれたので、貧困の時代の日本を知っているから戦争に対しての危機感を少しはもっているのだが、それより若い年代の教員が多く、とても説得力のある話とは言えるものではなかった。それがさらに戦争の関心を遠ざけて行ったのかもしれない。

今回、私ははじめてといっても過言ではないぐらい、まともに原爆のことを勉強した。何も知らなかったわけではない。祖母は原爆が投下されたとき、比治山にいて、まともに放射能を浴びている。父方の祖父は海軍だったため、戦場に行っていた。母方の祖父は、されて訓練中に終戦を迎えたらしい。私の周りに戦争は身近なところに存在していた。しかしそれはあまりにも昔のことで、想像をすることもできないぐらい現実的なものでないように思えていた。戦争映画を見ても、戦争の写真を見ても、どんなに戦争の話を聞いても、理解することはとても難しい。それどころか、関心をよせることがまったくできない。

今回、「ゴジラ」を見て、他のビデオを見ると、まったく同じようなものでしか見ることが出来なかった。危機感がまったくなく、アー戦争って怖いし、悲惨だね。もう戦争をしてはいけないね。と軽く思うだけで、数時間後にはまったく忘れている。人間は、自分がその場面に遭遇しないかぎり、危機感がもてないものだ。特に日本人はそうだろう。W 杯が日韓共同で開催されるが、韓国はフーリガン対策にはかなり力を入れていて、ニュースなどで、いろいろな事態を想定しての実戦訓練を行っている所をよく見る。しかし、日本人はフーリガン対策について何をしているのかわからないぐらいである。この違いは、韓国は隣の国北朝鮮と緊迫状態にあるので、危機感の持ち方が日本人とまったく違う。だからフーリガン対策にも敏感に反応することができるのだろう。しかも日本人は自分は大丈夫という自信が意味もなくあるという。だからフーリガン対策にもほぼ無関心といえる。

戦争に対しての意識もこれと似ている。戦争は自分には関係ないと考えている人がほとんどであろう。なぜなら、戦争を知らないからだ。戦争がどれだけのもので、被害はどれだけものなのかを理解することは難しい。頭で理解できていても、それはつもりでしかないのだ。

広島の若者の原爆に対しての意識の持ち方もそれとあまり変わらないだろう。広島県民が私的で原爆ドームを見に行くこともないし、原爆資料館も見学に行くことなんてありえ

ない。私は江田島で生まれ育ったが、旧海軍兵学校の資料館を見学に行ったことがないのと同じなのだ。原爆資料館も旧海軍兵学校の資料館も行くのは戦争をしっているお年寄りが多い。なぜか、戦争の恐怖を身をもって知らされたお年寄りがほとんどなのだ。若者が資料館を見学するときは学校の修学旅行が社会見学の時に限る。それ以外で行くなんてありえない。若者が戦争を知らないからだ。

広島の若者は、他の県の若者に比べて、特別に原爆に関心を持っているわけでもなく、もっていないわけでもない。

原爆を知っている人が広島県でそのくらいいるのだろう。本当に私の祖母のように広島市内で放射能を浴びた人はどれだけいるのだろう。「ひろしま」で原爆症の生徒は肩身の狭いおもいをしていたが、意外であった。原爆で身をもって体験した人はあまりいないのだろうか。原爆で投下された瞬間に多くの人が亡くなり、後遺症でも多くの人が亡くなっている。原爆の本当の恐怖を知っている人は現在とても少ないだろう。原爆の悲惨を伝える人があまりにも少ない。前にテレビで原爆の悲惨さを世界に伝えるために、アメリカに原爆の展示を開いたとき、アメリカ人の反感をかっていた。日本人は戦争被害者ではなく、戦争の加害者である、なのになぜこんなものの展示会を開くのか？という反感であった。もちろんそこには原爆を体験した人が、原爆の恐ろしさをアメリカ人にも理解してもらうための公演するのだが、その人達は、戦争の被害者として来たのではなく、ただ原爆の恐ろしさを理解してもらう為に来た。と言っていた。いやいや、原爆の恐ろしさをまったく理解できていないのは日本人、もっというなら広島の若者のほうではないのでは？という疑問が浮かび上がる。

8月6日が近くなると、広島の地方局は必ず一回は原爆に関する番組を放送している。夏になると季節もののように放送し、期間限定品のように取り扱われている。水爆実験が他国で行われたら、一部の人が原爆ドームで座り込みをしているをニュースで取り上げることもあるが、夏以外での原爆に関する番組がないのも、原爆への関心のなさを伺うことができる。関心がないのではないのかも知れないが、関心がものすごくあるようには見えない。

戦争がもう二度と起こらないように、原爆によっての被害者がもう出ないように…、そんな気持ちが被爆者を世界へまわらせている。戦争の危機感を感じていないのは日本人だけなのでなはいだろうか。世界中、戦争で苦しんでいる人が多い。しかも、被害者のほとんどが女性か子供である。子供は常に飢えている。

広島に原爆が投下されたのに一番被害を受けたのは子供である。市内は危険だろうと子供だけ疎開し、親は市内に残る。そして原爆投下―それによって子供は戦争孤児となり、施設に入らないで、食べ物もまともになく、結局犯罪に手を染めて行く。戦争で一番害者は子供である。大人の起こした戦争でまったく責任のない子供が一番苦しむ。無責任すぎる大人のせいで。

お年寄りの人はよく、「最近の子供は戦争をしらない。どれだけ恐ろしいかわかってない。」というが、それはそれで、大人のせいなのではないだろうか。子供の責任ではない。ならば、戦争の恐ろしさをわかってないというなら、あんなつまらない平和学習なんてやめて欲しい。太平洋戦争のものでは時代が古すぎるため、画像で見ても“作り物”という感じで、現実的ではない。そんなものを見せて「戦争って怖いでしょ？」と言われても、

「いえ。別に…」という答えがでてくるだろう。たぶん私はそう答えてしまうだろう。
とりあえず、私が子供を産んで、もし子供に戦争のことを聞かれて、どれだけのことを教えてあげられて、どれだけ理解させることができるのだろう。それだけが不安だ。(f 7)

○9月のアメリカのテロ事件のときにフセイン大統領だったかが「アメリカは原爆を落とすような悪い国だからテロの被害があっても当然だ」というような意味の言葉を言ったように思う。ちょうど原爆の映画を見だした時だったので、自分達との感じ方の差を感じてしまった。
原爆の映画を見て感じたことは一つの原子爆弾が如何に広範囲の罪の無い平和な人々の生活を破壊してしまうか、そしてそれが何年にもわたって影響を与えるかということだった。それはアメリカだけが悪かっただけではすまないで、二度と核兵器が使用されてはいけないということだと感じさせた。だから自分も含めた日本人は普通トレードセンターの映像を見て原爆の悲劇を感じると思う。アメリカの中東政策に関してイスラム諸国は色々とあるのだろうが、なぜこんな形で罪の無い人々が巻き込まれ攻撃されなければいけなかったのかと思うとフセイン大統領の言葉にはとても賛同できない。原爆のような(トレードセンターに旅客機が衝突することも含めて)惨事は加害国被害国問わずどこにも起こってほしくないというのが日本人の普通の感じ方ではなかろうか。これは日本人がそういう考え方をする国民なのか、それとも原爆の被害を受けたからだろうか。
自分はこういう機会に原爆の映画を何本も見たが、広島に住みながら今まで原爆に関する映画を見たことが無かったのはやはりもう原爆が落とされて五十年以上経ったせいだと思う。自分の両親も戦後生まれなので直接戦争も原爆についても何も知らない。だからどの映画を見ても戦争中や戦後はこういう様子だったのかと思いながら見ることが多かった。どの映画も作られて相当たっているので白黒だし、技術的にはあまりよくない(特に“ゴジラ”のような特撮映画は見ていて情けなくなる)ようだ。しかも原爆映画と名前がつけばどうしても悲惨な映像を考えてひけてしまう。ちょうど原爆資料館に一度行くともうあまり行きたくなくなるのと同じ事だ。しかし原爆資料館と一緒で、原爆映画も一度は見たほうが良いと思う。やはりこれだけ色々と考えさせられる映画もなかなか無いと思うからだ。原爆に関する間違った考えも減るのではないだろうか。
「はだしのゲン」や「原爆の子」は暗いばかりではなく楽しい場面もあるように工夫されているし特に「はだしのゲン」はアニメで子供が主人公ということもあって子供にも見やすい映画になっている。こういう映画をみんなが見やすいように、例えばテレビで放映するとか、また日本だけではなく外国でも(アメリカでも)上映するとかすればよいと思う。それが日本でまた世界での原爆の被害に対する理解を深めることになると思うからだ。
「ゴジラ」は他の原爆映画とは違って、直接原爆は出てこない。その分気楽に見られるものの科学的裏付けがあまりにも無いので、リアリティがなさ過ぎて問題提起になっていないように思う。水爆にも耐えたゴジラに普通の銃や大砲がなんの役に立つのか?被害を拡大するだけではないだろうか。ゴジラの吐く息(熱線?)は木やコンクリートも燃え出すほどの高温みたいだが、ゴジラの体内(少なくとも咽喉や口は)もその高温で溶けるのではないだろうか?突然出てきたオキシジェント・デストロイヤーは酸素を奪うらしいがた

んぱく質まで溶かすのはなぜだろうか？ゴジラの体を溶かしたために起こる被害はゴジラの被害より大きいのではないだろうか？科学に詳しくない自分にも(詳しくない所為か？)疑問ばかりで見れば見るほどうそらしく思える。

古代の恐竜がよみがえるという話の「ジュラシック・パーク」があれほどヒットしたのはコンピュータグラフィックによる恐竜の迫力とサスペンスの盛り上げ方のうまさ（主人公達がうまく逃げ回るシーンはちょっと都合よすぎる気もしたが）それに恐竜の化石の遺伝子を利用するといった少しはもっともらしい科学的裏付けがあったからだと思う。ゴジラのように原理不明の熱線を吐くわけでなく生態的にも現在考えられている最新の恐竜の生態に基づいているためリアリティが増している。純粋な娯楽映画で主人公達はハッピーエンドでありながら、コントロールされうると考えられた遺伝子操作とその成果の恐竜が、人間の予測を超えて暴走するという恐怖を感じたのは自分だけだったろうか。ちょうど原爆の被害が予測を超えて広がったのと同じように（アメリカがどれだけのことを予測していたか知らないが）また平和利用をめざしている原子力発電がチェルノブイリやスリーマイル島の事故を生んだことと同じことを感じる。(「ジュラシック・パーク２」では恐竜を島から出した人間が恐竜の暴走を作ったためだったためそれほど思えなかった。)

だから原爆に関する映画を現代の技術を使ってもう一度、つくらなくてはいけないのではないだろうか。こんな話をしていて少し思いだしたのだが、少し前に映画で「ブロークン・ハート」という（確かこんな名前の映画だったと思う）映画があった。その映画は奪われた核爆弾を犯人の手から取り戻すため主人公が立ち向かうという映画だったと思うが、この映画はおもしろかったと印象をもっていた。しかし核の恐ろしさというものが全く出ていなかった。これでは原爆映画になりえない。しかし子供達だけではなく大人等にも見やすいと感じたのではないだろうか。前の記述で述べたように原爆映画は見たいと思わない人が多いのではないだろうか。ならば、見たいと変化させなくてはいけない。そのためにはおもしろいと感じさせ、なおかつ原爆の恐ろしさを伝える映画にしなければ「見やすい原爆映画」にはならない。こんな映画ができれば少しは世界に核を使ってはいけないという気持ちが浮かんで来るのではないかと思った。

そういえばこないだバイトで１８０度の油を手にかけて大火傷をおった人がいるのだが、火傷の後を見せてもらうと皮膚が溶けていてすごい気分が悪くなった。原爆の映画を見たばかりというのもあったせいか原爆のことを少し思い出した。原爆を受けた人はこんな風に火傷をおっていて、しかもそれが全身にあるのかと思うと寒気がした。みんながこんなふうに思えれば核兵器というものがなくなっていくのではないだろうか。それは５本の原爆映画を見ていたからこそ思ったことだと思う。この原爆映画でレポートを書くというものは自分にも十分な価値があったということを感じた。(ｍ６)

○これまでにも何度か広島をテーマにした映画は見てきたが、ここ最近は全然見る機会がなかった。それに「ゴジラ」という今では結構有名な映画の初めを見られたのもいい機会だったと思う。ただどれも言えるのだが、結局人間とは恐ろしいものだという事だ。戦争にしろ、怪獣を殺せる装置の開発など。それに今も行われている核実験など。何のために、誰のためにこうした事が各国で起こっているのだろうか。悲しい限りである。

アメリカなどが核実験を行っているとニュースで聞くたびにリセットされる時計。いつになったら正常に動くようになるのだろうかと思う。その行為を行う事によって何をえる事ができるのだろうか。実際に発動したら自分の身も危ないというのに。それだけではなく地球そのものも危ないのではないだろうか。そこまでしなくても、そこまでしないと安心しないのか？自分の首をしめることによって自分が生きていると確信できる人みたいだ。決してその人たちを馬鹿にするわけではないのだが、自分をそこまで追い詰めなくてもいいのではと私は考える。

広島のあの惨劇を見ても何も感じないようではその人の精神を疑ってしまう。しかし戦争中の人たちはそんなことにも構っていられない状況にあった。それはある意味仕方のなかった事なのかもしれない。だけど戦後何年経っても各地の対立や内戦、紛争、テロ…などなどは終わる気配すら感じない。人間がもう少しだけでも思いやる気持ちがあったなら平和に過ごせるのではないのだろうか。かっこつけでも何でもなく、素直な気持ちでそう思う。恨みだけでは何も解決しないのだから。

身近なところでも今日本の政治だってあげ足取りばかりでちっとも解決しない問題ばかり抱えている。自分の行き方に自信を持つことはいい事だしそれだけなら問題ないのだが、それを押し付けたり、自分の言いようにことを運ばせようとして人を陥れたりとよくないニュースばかりだ。戦争の理由なんてそんな些細な事から始まるものだ。このまま迷走を続けていいものだろうか。

話を元に戻そうと思うが、どちらにせよ味わった痛み（経験）を忘れて暴走してはいけないということだ。経験を生かして、次に持っていかないといつまでたっても同じことの繰り返しである。下手をしたら日本だってすぐにでも戦争が始まってしまうかもしれない、テロが起こってしまうかもしれない、核実験の影響で人体に有害なものが流れてくるかもしれない。そんなことになったらどうなってしまうのだろうか。せちがらい世の中だからこそ人を思う気持ちを持っていたっていいじゃないか。

このビデオ等を見て思うのはもう見たくなかったということだ。つまりはこういうビデオが作られるような事は起きて欲しくないという事でもある。人が人でなくなる瞬間なんて誰だって見たくはないのではないか。病気で苦しみたくないのではないか。街が廃墟となってもいけないのではないか。これだけ言ってもまだやるという人はもうどうにも出来ない。このビデオ等を見ても何も思わない人と同じで理解できない存在となってしまう。確かに誰でも自分が可愛い。私だってそうだ。他人からも絶対にそう思ってもらいたいと思う前に自分が他人をそう思えばいいのに。簡単なようでもそれが難しい世の中なのだなとがっかりしてしまう。

とりあえず私は安心してゆっくり人生を送りたいと思っている人なので、人が殺されただのテロが起きただの恨みがあるなどといった負の感情をあまりみたくないし、感じたくないと思う。そういう場面に陥らない世の中になって欲しいと心から思う。願わくはもうこんなビデオを見なくてもすむように。（ｆ８）

○このビデオ５本を見て総合的な感想を書くとするなら、『原爆や戦争はいけない』としかいえないと思う。軽々しく言っているように思えるが、そのような軽い気持ちで言って

いる気は毛頭ない。自分の中にしっかりした太い気持ちがあるから言えるものだと思う。これらのビデオは、自分らが今までしてきた平和学習などを思い出させてくれた。

幼い頃から平和学習や平和になってほしいという運動をしてきた。平和学習で言えばホームルームの時間などを使い戦争に関わってきた人の話を聞いたり、実際に焼夷弾などが落とされた場所に行ったりもした。自分たちがあらかじめ調べて知識をもっておいて、実際に戦争体験者から話を聞いて調べていたもの以上の話が聞けると驚きと悲しみと怒りに包まれる。その他、平和公園はもちろん、原爆の痕が残る広島市内の建物や被爆電車、大久野島（毒ガス兵器製造所跡）、中国・朝鮮人を強制労働させて作らされた水力発電用のトンネル跡、沖縄のヒメユリの塔、韓国で日本人が朝鮮人にしたむごくひどい行為（韓国の資料館に行けば広島の資料館よりかなりリアリティがある）などたくさんのものを見てきて高校までずっと平和学習が続いた。

平和に関する行動というのは代表的なものでいえばやはり平和行進だろうと思う。大学にきてあまり知られてないのを聞いてショックだったけど、８月の４日から６日の３日間かけて県北の三次市から平和公園の慰霊碑の前まで８１キロを歩いて平和を呼びかけるものである。日差しの暑い中、何百人という人が行進をしながら「戦争反対！」「差別をなくそう！」と叫びながら進んでいくのである。それを見て頑張ってくださいと泣いているおばあさんがいることもあった。それだけでもやっていてよかったと思える気がする。

戦時中のヒロシマというものがどんな現状だったのかというのが今までもあったのだが、今回のビデオの「ヒロシマ」「はだしのゲン」「原爆の子」「黒い雨」を見て総合して考えると原爆投下のされたあとどんな感じだったとか、当時の生活がどんな感じだったかなどよく分かった。文章にするのすらどう表現してよいか分からないくらい悲惨な現状でまさに地獄絵図であったのかと思うと今の時代に広島に生まれてよかったと思うことがある。自分でそんなこと思ってもいいものかたまに考えるが、高齢者と話すときによく「あんたらぁええ時代に生まれたのぅ」と言われることがある。たしかに食べ物に不自由することはないし、交通の便もかなり発達した。親も頑固一徹のカミナリ親父じゃなくなった。戦争が起きそうな気配はこれっぽっちもない。だけど、この平和な時代を維持していくのは戦争を体験した世代でなく、戦争を体験した人の子どもの世代でもない。戦争をまったく知らず、話だけで育った私たち以降の世代だと思う。

今では戦争を本当に知らない人たちが多く、外国で起こる紛争系のニュースにまるで興味を持たない。「だからどうした」「自分には関係ない」「それどころではない」という雰囲気を出している人でいっぱいだ。だけど８月６日の黙祷だけはみんなする。心のどこかではみんな平和を願っているのだろう。

日本に愛国者が少ないのは戦争に関係したものだと思う。広島・長崎に原爆が投下され他の大きな東京や大阪などの街も空襲にあい、日本は被害者だと思いがちだが日本は朝鮮半島・満州をはじめとするアジア諸国に自分たちがアメリカにやられた以上のことをしてきている。

７３１部隊という日本軍にあった部隊を知っているだろうか。わたしも中学のときに授業の一環としてビデオを見せられただけなのだが、鬼畜とはこの事かと実感できるくらい日本人はひどいことをしている。朝鮮人を「マルタ」と呼び、人体実験などの材料にしていたのです。極寒の吹雪の中で両手に氷水をかけられ、凍りついたころにいきなり熱湯を

かけられ手を引っぱると皮と肉が全部取れたり、立てた棒に縛りつけられ毒ガスをその人たちの付近で噴出させ、どうゆうふうに効いていくのかと遠くから双眼鏡を使いデータをとったり、朝鮮の女性は従軍慰安婦としてただＳＥＸするだけに使ったりしていた。

人間のすることではない。現代の子どもは学校の社会科やホームルームの時間で加害者の日本と被害者の日本を学んでいる。少なくとも私はそうだった。日本人はこんなことをしていたと分かっていたら現代の学校の入学式や卒業式などにおいて、国旗「日の丸」に礼や国歌「君が代」を歌うことなんかできるはずもなく日本人でありながら日本を好きになれないでいる。

現在、韓国と日本はワールドカップ間近ということで交流が盛んである。が、日本側がどれだけ友好に接していようとも韓国側（特に年輩の人たち）は納得していないと思う。なぜなら、過去に日本がしてきた過ちを正式に謝ってないからである。謝って済む問題ではないが誠意を見せた方がいいと思う。できるなら私が日本代表で土下座したいくらいである。たしかに今でも朝鮮人を「チョン」と呼び、見下してバカにした感じの人もいるがそうでない人もたくさんいることを知ってもらいたい。仲良くなりたい。私の地元・広島県北部の高宮町という町でも、数年前から韓国の青年たちと交流がある。私はまだその交流に関わったことはなく話で聞いただけだが高宮町に招待し、ホームステイを地域の民家でしてもらいながら交流しているようである。私の友達の家に女の子が二人泊まったらしく結構楽しかったと聞いている。また機会があれば参加してみようと思う。（ｍ７）

○原爆というモチーフを使った映画がこんなにあるとは思わなかった。これだけ衝撃的な出来事で、しかもここ日本において、それも広島に原爆が投下されたわけだから、原爆を題材とした映画が無いほうがおかしい。しかし、今回見た５本の映画の中で、私が知っていたのは３本だけだった。今回は５本だったが、原爆を扱った映画はこの他にももっとあるだろう。だが、今回私が知っていたのは前述したとおり３本しか知らなかった。何故なのだろうか。

答えは簡単だ。原爆を扱っている映画は原爆の悲惨さ、恐ろしさを表す為に、その映像表現も悲惨さを前面に押し出しているというイメージが例えそうではなくとも私の頭の中に刷り込まれているからだ。私は残酷描写に快感を覚えるほうではないし、ほとんどの人がそうだと思う。そんな中であえて残酷で悲惨な描写が多いであろう原爆映画をすすんでみることはまず無いだろう。特に私は広島の人間ではないので尚更だ。広島の人間なら、この広島に落とされたわけだから原爆がいかに駄目なものかを後世に、そして世界中の人に伝えていくためにも原爆映画を他県の人間よりは見ているだろう。が、どんな人間だってこのような映像を好き好んでは見ないだろう。「ひろしま」はそれが最も端的に表れたものだった。ただただ悲惨な映像が続くだけ。物語もくそも無い。そのような映画をすすんでみる人などほとんどいないはずだ。残酷描写が多いということは、実際の原爆落下直後はもっと悲惨だったのだろうということは安易に想像される。

「ひろしま」を見てから私は、映画を見ることに対してより一層の警戒心を持ってしまった。例として「ひろしま」ばかりを出してしまっているが、別に「ひろしま」を憎んでいるわけでもなんでもなく私が今回見た映画の中で一番顕著に表れていると思ったからである。

ただもう一度見ろといわれたら、丁重にことわるだろうが。

しかし目を覆いたいものでも現実を直視しなければいけないこともある。いつまでも臭いものには蓋をしたままではいけないことが大半なわけで、「ひろしま」を一概にだめだということは出来ないだろう。

一方で「黒い雨」、「原爆の子」の２つはそれなりに安心してみることができた。両方の共通点としては、原爆が落とされた後の生き残った人々にスポットライトが当たっているということだ。その中での人間関係を描いているというのが私の中では見やすいと思った原因だろう。原爆の被害を受け、原爆症になった人々とそうでない人々との日常生活の中でのせめぎあい、その両者の間で起こる人間関係。そういう話は私の好みの部類にはいるので他の映画に比べれば見やすかった。更に言えば物語が淡々と進んでいくことも良いほうに作用したのだろう。

「ゴジラ」はこの中では異質な存在だったと思う。他の４つとは違って直接広島というものには触れてはいない。原爆というものの愚かさ、人間の愚かさというところで他の作品とつながっていると思う。ゴジラはもともと娯楽としての作品として作られたと思うので、他の４つとは異なったニュアンスがしたのかもしれない。しかし原爆へのアンチデーゼとしては一番「ゴジラ」が明確に表れていたかもしれない。

「はだしのゲン」はアニメ映画だった。「はだしのゲン」は初めて見るわけではなかったのでそれほどショックも受けずに見ることが出来た。けれどもこれを小さな子供に見せたら間違いなくトラウマになるだろうなと思いながら見ていた。その他、驚いたのは、この「はだしのゲン」の監督をしたのが真崎守だったことだ。アニメ監督をしていたのは知っていたが、まさか「はだしのゲン」を作っていたとは。本当に驚いた。「はだしのゲン」は最後明るい未来へ向かうという暗喩があってこの辺りは子供向けでほのぼのしていい気分になった。この作品の中で天皇についてほんの少しだけ言及しているが、「はだしのゲン」が広島において小学校のときから見せられるというのはこのような考えが浸透してしまうのではないのだろうかという一抹の不安も同時に感じられた。

私のこの一連の原爆映画を見て思ったこととして嫌だったことは悲惨さの描写の他にもう１つあった。それはその映画の中で製作者、原作者の思想が透けて見えることだ。すべての映画でそれを感じたわけではないが、いくつかの映画ではそれを感じてしまった。物を作るということは、そこに自分の考え、メッセージなどが表れてしまうというのは当たり前のことだが、露骨過ぎると暑苦しくなってしまう。話の筋に沿っているなら別に気にはならないが、そうじゃない場合は違和感しか残らない。今回の場合は後者だった。私は別に左でも右でもないが、どっちでもない為に違和感を感じてしまう。

しかしながら、私の周りには原爆についての体験がある人は今まで居らず、聞いたことがあるのは広島への平和学習の時の語り部の話。これはほとんどといっていいほど聞いておらず、長崎に行ったときも原爆の話があったかどうかも覚えていない始末。そんな状態の私にとってこの一連の映画を見たことは、とてもプラスに作用すると思う師、有意義であったと思う。（ｍ８）